

瀬田・田上鳥瞰絵図について

蔭山 歩

はじめに

みなさんこんにちは。龍谷大学の里山ORCリサーチアシスタントの蔭山です。10分程ですがどうぞ宜しくお願い致します。今回、会場前に『様々な視点から見る大津の里山展』というテーマで展示をさせて頂きました。そこへ出展した「瀬田・田上鳥瞰絵図」について今日はお話をさせて頂きます。

大津市仰木地域での縁

まず、自己紹介をさせて頂きます。私は、大津にあります成安造形大学の住環境デザインクラスで、建築や地域の住環境デザインを専門に学びました。成安造形大学は、仰木という歴史の古い集落のふもとに位置します。在学中に仰木の歴史や、集落の成り立ちに関心を持ち、祭礼行事や民俗調査をしていました。調査を通して地域の方と出会いがあり、2002年には地域のまちづくりや活性化のための「仰木の地図」を制作する企画に関わり、その時初めて鳥瞰図という図法で絵図を描きました。その後、地域との関係を深め、2003年より地元からの推薦採用で仰木公民館の生涯学習専門員として、仰木地域の社会教育や地域文化、福祉、生涯学習などに2年間務めました。また、仰木の棚田をはじめ滋賀の里山を撮影している写真家の今森光彦さんと出会いました。今森さんが撮影のフィールドとしている里山を体験するエコツアー「今森光彦の里山塾」にて現在、ツアーガイドスタッフとして関わっています。また、仰木の調査に来られた龍谷大学里山ORC研究スタッフの先生方と出会ったことで、今、この龍谷大学里山ORCで、社会人文科学や地域共生学調査研究をする2班で研究補助をさせて頂いています。仰木では本当に多くの縁に恵まれました。

鳥瞰絵図について

さて、次に私が地域を表現する手法として制作してきた「鳥瞰絵図」について説明します。これは、2002年に仰木での企画で描いた鳥瞰絵図「こころのふるさと仰木里山マップ」(図1)です。「鳥瞰」と書くように、鳥の目でみた、空から地域を見渡している、空間を大きく捉えた絵巻物のような絵図です。「鳥瞰絵図」は、大正・昭和期に、吉田初三郎という絵地図師が確立させた図法で、描きたい地域を中心に大きく捉えて描き、周辺の地域をつながりのある形でデフォルメし描いています。この地図図を見ていきます。まず、一番見せたい仰木地域を比叡山より大きく描きました。そこから周辺地域である仰木の里、堅田、雄琴を描き、左側へ目を移していくと、大津や瀬田川、そして大阪や大阪湾までが見えるという水の流れや地域のつながりを描いています。そしてまた、右方向へは、仰木と京都大原との山向こうでの文化や流通での繋がり、そして、そこから鯖街道を抜けて若狭へのつながりを描くことで、集落の形、立地条件がわかりやすく、そして周辺地域とのつながりが見えてくる絵図になっています。

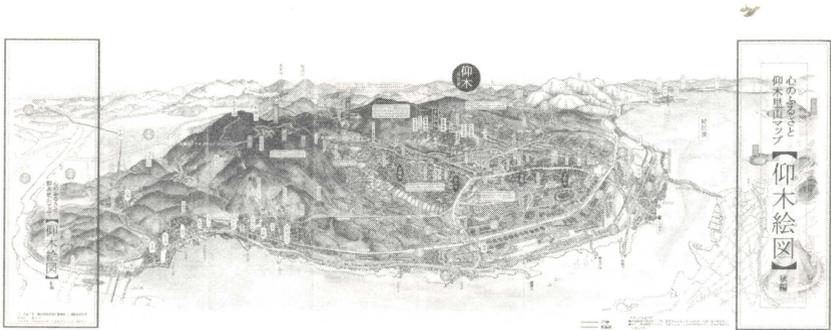


図1 「こころのふるさと仰木里山マップ」

企画：大津市・仰木学区地域活性化委員会 協力：成安造形大学 絵図：蔭山歩

鳥瞰絵図の制作過程

今回、龍谷大学の瀬田キャンパスを中心に鳥瞰絵図を描くということに取り組みました。絵図ができる過程を報告します。まず、描く対象の地域へフィールドワーク（野外調査）に行き、とにかく地域を歩き回ります。そして、地域の方にお話を伺い、文献資料等を調べて、地域の情報や資料収集をさせていただきます。そして、絵図の制作に入ります。

まず、資料やフィールドワークで集めた情報をもとに、絵図の構図を決めます。何を中心に据えて、琵琶湖の位置は上か下かなど地域のもつ方向感覚などをとらえ、つながりある地域や情報をどのように描くかを決めていきます。構図が決まれば、何度も下書きを繰り返し線を決めていき、ペン入れ、そして色付け（彩色）をして、原画が仕上がります。その後、編集作業をして、フィールドワークで教えていただいた地域の魅力などの情報などを原画の上にパソコンでデザイン編集をして、印刷し、完成となります。

フィールドワークと出会い

私が絵図を作るにあたって、一番大事にしているのは、「フィールドワークと聞き取り」の部分です。地図を作ったり絵図を描いたりすることは、いろんな資料さえあれば描ける人はある程度描けると思うのですが、私の場合は、地域の人的大事に思っている場所であったりとか、普段歩いている場所であったりとか、そこに眠る歴史や物語などを、お話を伺った上で描くということをしごく大事に考えています。

龍谷の森

今回のフィールドワークは、まず龍谷大学瀬田キャンパスにある「龍谷の森」から入りました。里山ORCの先生方の調査や「龍谷の森」里山保全の会がされている落ち葉かきや肥料づくり、ほだきから椎茸を作る活動や、ため池作り、瀬田地域の小学校の子どもたちの環境教育の授業として利用されている活動に参加する中でいろんな発見がありました。春、もえぎの色を見ると樹木の種類が見分けられることができること。鳥の鳴き声だけで鳥の種類を聞き分けデータをとる調査、地を這うように蜘蛛を調査されたりしていました。森には観測タワーがあるんですけども、タワーの上部で見つかる虫と下部で見える虫が違うことや、コウモリがどこをどのように飛んでるかなどの調査をされているなど、調査の面白い話を聞きながら、森って、自然って何だろう、生物多様性って何やろうと、想像力をかきたてられながら森を歩かせてもらいました。そして、そこから「里山」を介して生まれる自然と生き物と人との関わり合いや繋がりみたいなものに、関心が強まってきました。

瀬田、上田上・田上地域へ

その次に森を出て、瀬田、上田上・田上地域へのフィールドワークを始めました。里山のくらしへアプローチです。まず、瀬田丘陵から東側に位置する上田上、田上地域へ行きました。地域の方々に、昔から使っているもんどりの話や、地域にある古文書を見せて頂きながらお話しをうかがい、湯立祭や祭礼行事へ参加しました。田上地域は大戸川の氾濫で集落が流される歴史があり、昔から自然との戦いをしてきた地域なんです。地域の方々は、自分たちの歴史や文化を大事にされています。特産物である菜の花漬けや、干し柿等の保存食等もそうです。また、たくさんの民具を収蔵されている上田上郷土史料館では民具調査を通して、素敵なお方達にお会いさせて頂いて、山や田んぼでのくらし、女性がしていた機織りものや柴刈りのお話など、またダムや道路工事など今のお話をきかせてもらいました。里山が、豊かでのんびりしていいなあということだけではなく、今起っている近代化の波や、鳥獣害の問題などでいろんな戦いがある場所だということも実感してきました。

また、瀬田の南大萱の方たちとの出会いがありました。今年の五月、里山ORC研究スタッフであり、国際文化学部教授の吉村先生の企画で、南大萱資料室の方々と一緒に南大萱展が開催されました。資料室の方々は、リタイアされた後、地域の歴史を調べ、壮大な『南大萱史』を作られました。歴史を話すポキャブラリーがたくさんあることやパタリティーにとっても刺激を受けました。

フィールドワークでは、お祭りに行く事が一番大事だと私は思っています。ハレの日は、普段見ている地域の姿とは全く違うんですね。熱気がある。その地域の生の部分とか、大事に受け継がれてきた精神性みたいなものが現れると思います。萱野神社の例祭では、年代別に組織された若者衆の神輿かきのやりとりや、神輿の渡御の途中で60歳以上の還暦を迎えられた赤の服を着た方が神輿かきに加わる様子などをみていくと、地域の中での暮らし方というか、つながりの形というのが、儀式の中や仕組みの中にちゃんと組み込まれているのが面白く、そして感心させられました。

また、南大萱資料室で出会った國松さんのスケッチにはとても刺激を受けました。今日は、一緒に展示させていただいているんですけども、國松さんの視線や、筆遣い、色使いなどとても参考になりました。

構図・下図をつくる

瀬田・田上絵図は、フィールドワーク、聞き取り、資料収集を通して得た情報や、物語・歴史を盛り込んだ構図にしたいと思いました。石山寺の上空から、龍谷の森にいるオオタカが地域を見渡し、見守っているようなイメージで、右に田上山、田上盆地、そして真ん中には瀬田丘陵があり、左に瀬田地域が広がって、というように考えていきました。下図を進めていくと、交通の要所がとても大事なので、瀬田の方に現在の主要道路が多いので、それを丁寧に描いて、後は、東海道、旧東海道の道であったり、瀬田と田上を行き来している関係や、地域で大事にされている田上不動寺をはじめとした神社などを慎重に配置させていきます。全体の構図をイメージしながら、細部の情報をデフォルメしながら描き入れます。この作業が一番時間がかかります。今回は瀬田と田上という二つの地域を描いたので、下図を描くのにとっても時間がかかりました。そして、彩色し、今回出来上がった原画がこちらになります。(図2)



図2 瀬田・田上鳥瞰絵図（裏見返し参照）

絵図から見えてくるつながりの形

絵図の中で大事に盛り込んだところを話します。例えば、上田上の牧町のおばさんからのお話して、牧の山でアヤ柴を刈って、それを草津の野路という所まで大八車で売りに行った。その道中で食べるうどんがおいしかったなあ、という記憶を思い出しながら野路への道を描きました。また、田植えの話を聞かせていただいたんですけども、

上田上牧町では、源内峠を越え、瀬田の月輪まで田植えのアルバイトに行っていた。その時、若い娘はシロカスリの三幅前垂れをつけ田上手拭をかぶり着飾ったというお話を聞きました。そしてなぜ月輪で田植えを人に頼むかということも瀬田で聞くと、瀬田には山がないために水を貯水する溜池がたくさんつくられていて、田の水入れは溜池の水を一気に流し入れるため、一斉に田植えをしなければならなかった。だから、人を集める必要があったんだと。田植え作業は何日か続くため、アルバイトの人の泊まる場所やご飯を作る人が必要になって、自分の家の田植えもあるし、衛生問題をちゃんとするためにも、お母さんたちが組織して部隊を作ったんだという話を聞きました。くらしと地域のつながりがわかり、すごく面白いですよね。その話を思い出しながら、現在の月輪を描き、源内峠を実際より太く描く。そして、ため池を全部描きました。一度、半日かけて、吉村先生や南大萱資料室の方たちの案内で南大萱ため池めぐりをさせていただきました。ひとつひとつのため池に歴史あり。是非ちゃんと全部描きたいなと思ったので、描きました。また、大日山には如来様、太神山には万葉集の歌、瀬田の唐橋のそばには依藤太、唐橋の下には龍を、隠し絵的に物語を潜ませ描きました。

現在の生活の中では田上と瀬田のつながりはなかなか見えてはきません。でも以前は物や人材、情報が、心の繋がりのある形で行き来されていたんですね。その二つの間に、源内峠に沿うように今、龍谷大学と龍谷の森があるという意味というか、実感を、この絵図を描きながら感じています。

最後に、皆さんにご協力いただきたいと思っています。これから、この瀬田・田上絵図に地名などを記載し配布用に編集します。これは仰木地域で作ったものです。このように地名を入れ、歴史的な場所や大事なポイントは落とさないよう記載したいと思っています。仰木の場合では、あのお寺が抜けていると、字が間違っていると、お叱りを受ける事があったので、この後の休憩時間にこの場所は絶対大事だということをお話がございましたら、聞かせて頂きたいなと思います。

コミュニケーションツールとしての絵図の可能性

私は、こういう風にみなさんと一緒に自分の暮らす地域を見渡す作業の中で、新しく何か見えてくるんじゃないかと考えています。仰木の絵図の時には、そうすることで、昔の歴史や、今これからこうしていったらいいじゃないかっていう、未来の形への提案

や発想などを、皆さんと一緒に分かち合える機会となり、実感として地域を知ることにつながっていくだと実感しました。今日はこのように画面で見えながら、私が一方的にお話している形ですが、そうではなくて絵図を見ながら、この地域に住む子ども達や若者からお年寄りの方、龍大に通う学生なんかとも、一緒に歩いたり話し合ったりしてみたいと思っています。

本日は、こういう大きな場所で、この絵図お披露目させて頂いて、大変光栄に思っております。ご協力頂いた南大萱、上田上、田上のみなさん、龍谷大学の先生方、本当にありがとうございました。この場をおかりして御礼とさせていただきます。ありがとうございました。